

## 案山子

案山子は秋の季語ですが、案山子といえば、

笠とれて 面目もなき かがし哉（蕪村）

夕焼けの あへなく消えて 案山子かな（万太郎）

という句にもあるように、いささか情けない存在に見えます。

実際、案山子というのは、田んぼや畑に一人ぼつねんと立ち続ける以外には何もできず、風雨に晒され、誠に哀れというしかありません。この何もできない姿から、広辞苑では「見かけばかりもっともらしくて役に立たない人」のことをいうとしています。まあ、見かけ倒しということでしょうが、案山子には気の毒のような気がします。

そもそも、「かかし」にどうして「案山子」という字を当てるのでしょうか。中国の禅書に高くて見事な山を「主山」、その前にある低くて平らかな山を「案山」、その麓に置く人形を「案山子」と称するとの記述があるそうで、それが日本にも伝わったのかなと思います。「案山」は、低くて平らかな山で、耕作に適していたので、案山子は、そこでできる農作物を守るため大事な役割が与えられていたと考えられます。

とはいえ、案山子は鳥獣に対して「人間がいる」ように見せかけるために存在しているのですから、見せかけだと分かった瞬間に神通力がなくなるのは致し方ありません。

ドロシーと旅を続ける案山子が、カラスに馬鹿にされたくないのに脳みそをほしがった（オズの魔法使い）のも分かります。

日本で、案山子というものが登場するのは凄く古くて、古事記の世界にまで遡ります。

大国主神が出雲の御大之岬（美保崎）にいらっしゃった時、海の彼方から天之羅摩（あめのかがみの）船（ふね）に乗ってやって来る神がいます。大国主神が

その神に名前を尋ねるも答えず、周囲の神たちも皆知らなかったのですが、谷(たに)蟻(ぐぐ)(ヒキガエル)が「崩彦(くえびこ)」が知っていると申したので、「崩彦(くえびこ)」を呼んで尋ねたと記されています。この「崩彦(くえびこ)」こそ、山の田の案山子のことで、一本足だから歩くことはできませんが、天下のことをよく知っている神とされています(竹田恒泰著「現代語古事記」)。古事記は、身体は一本足しかなくて不自由であっても、知恵や知識があれば大きな役割を果たすことができることを示しています。

そういえば、ドロシーと旅する藁でできた案山子も結構物知りですものね。

そういう目で、改めて案山子を見ると、畑に佇む案山子には、哀愁というか、孤独の陰があり、哲学者のようでもあります。じっと佇みながら、世の中のことをしっかり見ているという感じでしょうか。

さだまささんの曲に「案山子」というのがあります。これは、故郷を出て行った弟にでも話しかけているのでしょうか、都会の雪景色の中で、田圃にぼつりと置き去られて雪をかぶった案山子の様に寂しい思いしてはいないか心配しています。

しかし、私は、案山子は寂しいだけの存在ではないと思っています。確かに孤独ではあるかも知れませんが、彼は、自分のいるべき場所でしっかりと役割を果たしています。夏目漱石の俳句に、「ものいわぬ 案山子に鳥の 近寄らず」という句がありますが、毅然とした姿が美しくさえ感じられます。

(塾頭 吉田 洋一)